

提 言

現代における感染症と小児保健

岩田 敏 (国立がん研究センター中央病院感染症部 / 慶應義塾大学医学部)

先進諸国では少子高齢化が、途上国においては貧困と紛争が問題となっている今日において、感染症の克服は全世界共通の永遠の命題である。ワクチンの普及により多くの感染症が予防できるようになっても、抗微生物薬の開発により多くの感染症を治療することができるようになっても、感染症が依然としてヒトの生命予後を決める重要な要因となっていることは変わっていない。ワクチンで防ぐことのできる疾患 (vaccine preventable diseases ; VPD) を予防するワクチンの種類は増えつつあるが、それでもその数には限界があるし、抗微生物薬に関していえば、やはり耐性を示す微生物の出現は防ぐことのできない事実だからである。加えて現代の感染症においては、交通手段の発達による人的交流や物資の流通に伴い、感染症のグローバル化が問題となっており、感染症をヒト・動物・環境のすべてが関わる分野横断的な課題として捉え、One Health (ワンヘルス) という考え方のもと、地球規模で考えていく必要性が高まっている。新型インフルエンザのパンデミック、西アフリカにおけるエボラウイルス病の流行、国内におけるデング熱の流行、韓国における MERS コロナウイルスによる中東呼吸器症候群の流行、南米を中心としたジカウイルス感染症の流行など、その脅威に全世界が震え上がり、国際的な感染症危機管理のあり方と感染症対策の重要性が改めて議論されたことは記憶に新しい。さらに抗菌薬の使用に伴って生ずる薬剤耐性菌についても、海外で問題となっている耐性菌が国内に持ち込まれるリスクは常に存在している。このように感染症は常に変貌し、日常生活の中の身近なところで、私たちの生活・健康に影響を及ぼし続けている。



感染症への対策の4つの柱は、疫学、診断、治療、予防であり、これらが一つでも疎かにされれば、感染症のコントロールは立ち行かなくなる。感染症の克服という大きな夢に向かって、疫学においては分子疫学的解析およびグローバルな視点での解析が、診断においては迅速性が、治療においては薬剤耐性 (AMR) 対策としての抗菌薬適正使用と新規抗微生物薬の開発が、予防においては各種ワクチンの開発と普及が、それぞれ求められており、これらの課題に対して現在産官学一体となった活動が展開されている。

小児保健において感染症対策は最も重要なテーマの一つであり、近年の予防接種の普及により、麻疹、風疹、水痘、百日咳、肺炎球菌やインフルエンザ菌 type b (Hib) による侵襲性感染症、ロタウイルス感染症など多くの VPD がコントロールされてきている。昨年4月からはB型肝炎ワクチンがわが国でも漸く定期接種化され、生まれてくるすべての子どもたちに接種が行われるようになった。残された課題として、まだ定期接種化されていないワクチンの定期接種化、予防接種を受けられなかった小児・成人に対するキャッチアップ接種の実施、ワクチン既接種における百日咳発症に対する百日咳含有ワクチンの接種時期の見直し、B群溶血性レンサ球菌感染症、RSウイルス感染症などに対するワクチンの開発などが挙げられ、今後の検討に期待したいところである。また予防接種も含めた感染症教育に関しては、医療系の学校だけでなく、小・中・高校を通じてカリキュラムの中に取り入れ、実施していくことが重要であり、そうした基本的な教育こそが、小児保健も含む国民全体の感染症・感染症対策に対する正しい理解と行動に結びつくものと考えている。